保育職志望の高校生における書き物に対する認識
―特に指導計画の作成に焦点を当てて―

永盛　善博

本研究の目的は、保育職志望の高校生における書き物業務に対する認識を明らかにすることにあった。そこで、本学子ども学科のオープンキャンパスに参加した高校生141名を対象に、保育職に対するイメージや、書き物としてどのようなものがあるかを尋ねるアンケート調査を行った。その結果、永盛（2012）と同じく保育者の仕事内容として指導計画の作成があることは、回答にあまり出てこなかった。高校生のこのような認識の原因として、そもそもそこまで確固たる思いで保育職を志望しておらず、そのためそこまで念入りに保育者の仕事や保育者養成課程での学びについて把握しようとしていない可能性や、それでも連絡帳や記録といった指導計画の作成以外の書き物業務については決して無知ではないことを確認した。そしてこの認識を踏まえた指導計画の作成に関する指導について考察を行った。

問題と目的

本研究の目的は、保育職志望の高校生における書き物業務（特に指導計画・指導案の作成）に対する認識を明らかにすることにある。

保育の仕事において、保育の記録や計画の作成といった書き物業務は、重要なものであると同時に大きな負担となるものである。永盛（2016）が示したように、その大変さは学生が思っていた以上である。永盛（2016）では、短期大学保育者養成課程の学習を終えて卒業間近の学生91名を対象に、保育者の仕事と保育者養成課程での学びに関する入学前と入学後でのギャップについて尋ねており、保育者の仕事、養成課程での学びのいずれにおいても「書き物」が１位となっている。また、木梨（2017）は『もう「書く」「伝える」に困らない！保育で使える文章の教科書』の冒頭を「『保育士がこんなにも文章を書く仕事だったなんて』保育士になったばかりの人たちからは、このような声が多く聞こえています」（p.9）という言葉から始めており、保育現場に出てから真の大変さに気づくこともあるくらいである。その大変さは、時に、ベテランの保育者でさえ仕事をやめようと思うことがあるくらいのものである（渡

邉、2004)。最近では、一般向けの雑誌である『ＡＥＲＡ』においてすら、「保育士が忙しすぎる：書類作成に行事準備…トイレに行けず膀胱炎」（深澤、2016）という見出しで記事が書かれているほどである。

数ある書き物業務の中でも、保育において計画を立てることは、保育者の専門性の１つであり、保育活動の本質につながる部分である。たとえば三浦・垣内（2011）は、保育者の専門性にかかわる指標として、月案・週案づくりといった指導計画の作成を挙げている。また、吉村（2001）は保育者の仕事内容として実際に保育を行うことや記録をとること、研修を行うこと、家庭との連携を進めることなどを挙げている中で、保育の計画を立てることを第一に挙げている。さらに、日本の保育・幼児教育の大前提となる『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』（平成20年版）においても、それぞれ「指導計画」「保育の計画」という名称を用いて１つの章が設けられているほどである[1]。また保育活動としても、白石（2015）は、「援助・指導は、保育者の意図的・計画的な行動である。行き当たりばったりの無計画な行動を、指導とは言わない。保育者は、最善の努力を尽くし、慎重に自分の指導の意図を検討し、計画していかなければならない」（p.21）と述べ、計画の作成義務だけでなく、計画の作成に最善の努力を尽くすことまで求めている。また田中（2011）は、「保育は『保育所保育指針』や『幼稚園教育要領』に基づいて進められ、思いつきや行き当たりばったりで行われるものではありません。保育は意図的計画的な指導そのものです。それゆえに、「指導計画」があります」（p.2）と保育を「計画的な指導そのもの」とまで言い切っている。それは保育現場に就職してから始まることではなく、保育者養成課程で学ぶ段階においても、指導計画を立てることは必須であり、「実習で最大の課題」「実習のなかでも最大のエネルギーを使うこと」（久富、2009)、「実習の最難関」（開、2012）と言われるほど、重要なものである。

このように保育計画の作成は重要かつ大変なものであるが、このことに対する学生の理解や、それを保育者の業務として受け入れる姿勢は、必ずしも好ましい状態とは言えない。私のそもそもの問題意識は、保育者養成課程の学生の学びを、より意欲的なものにするために、記録や指導案といった書き物に対する指導が重要な役割を果たすのではないかということから始まっている。保育者養成課程の学生、特に短期大学の学生は２年間という限られた時間の中で保育士資格、幼稚園教諭免許状を取得する必要がある。そのため、時間的・体力的・気力的に厳しいスケジュールの中で学びを進めている。そのような学びを指導する中で私が感じたのは、実習の指導案や記録といった書き物に難しさを感じ、学習意欲や保育者としての就職意欲が低下している学生が多くいるということであった。

保育士不足が社会問題となっている中、保育現場に就職してから、自分が思い描いていた保育現場と現実との違いにショックを受けて退職してしまう「リアリティショック」（たとえば谷川、2013）や早期離職（内田・松崎、2016など）の問題がある。

---

[1] 計画性や計画を立てること自体は、必ずしも書くことを伴うわけではない。ただ、「保育の仕事は、指導案に限らず「書く」ということからは逃れることができません」（久富、2009、p.1）や「多くの現場が、保育を計画し、それを紙面に表し、実践できることを、１つの実習の達成、つまりは保育者になるためのマイルストーンと考えています」（p.2)、「保育者は「書く」という営みから逃れることはできません」（谷川、2006、p.3）と指摘されている。これらのことから、本論文では、指導計画を立てることは、指導案を書くことと捉えることとする。

また、渡邉（2004）が指摘しているように、ベテランであっても計画作成の大変さから仕事を辞めようと思うことがある。保育者養成課程、および保育者としての就職後において指導計画の作成がこれらの問題の一因とならないためにも、丁寧な対応が必要となる。永盛（2016）が示しているように、保育者養成課程への入学前と学び終えた後でギャップが大きかったのは、「書き物」に対する認識であった。したがって、対応の１つとしては、保育者養成課程入学後の対応に加え、養成課程以前、すなわち高校生の段階から保育者の書き物業務についてどのような認識を持っているのかを考慮し、その認識を踏まえた対応をする必要があるだろう。

この点について、永盛（2012）は、入学する前の保育者志望の高校生が、保育者の仕事内容をどのようなものと理解しているかを調べるために、約20名を対象にアンケート調査を行った。その結果、子どもの成長援助や保護者との連携といった仕事内容は理解していた。しかし、保育の計画を作成したり、日々の保育の記録を書いたりといった書き物業務は自由記述ではほとんど出現してこなかった。

このように保育計画の作成には重要な役割と大変さがあるにもかかわらず、なぜその重要さ、大変さが高校生に認知されていないのであろうか。この点について、高見ら（1999）と山本ら（1999）による一連の研究が示唆的である。この研究では、高校生の職場体験の内容を巡って高校生や現場の保育者に調査を行っている。その中で、保育者は「子どもと一緒に楽しくすごしてもらえばそれで十分です」「『保育者』となって子どもを援助したり、働きかけをしてほしいといった指示は出さなかった」「とても楽しく過ごし、進路を決める参考になった様子であったので、よかったと思う」（p.796）と述べている。また、永盛（2018）が保育者養成校入学生約400名に職場体験内容について尋ねたところ、「先生方と同じような仕事」「先生とほとんど同じ」「小さな先生のような存在になって一緒に働いた」といった回答が得られている。さらに大久保（2015）によれば、保育者養成課程に入学した学生のうち、64％の学生は中学校・高校時代に保育ボランティアや職場体験を行っており、そのうち94％が進学のきっかけになったと述べている。これらのことから、職場体験で行ったようなことが「保育」そのものであり、それゆえそれ以上の情報が入りづらくなったり、情報を求めなくなったりした可能性がある。

また、そもそも保育者を志望していると言っても、そこまで強い思いではなく、それゆえ情報収集もあまりなされない可能性を示唆する研究もある。山本（2014）は保育者養成校の学生の中高時代の職場体験時の振り返りを行い、職場体験が必ずしも現在の進路選択につながっていないことや、自分の適性を判断する材料となっておらず、進路選択の理由もテストの成績が大きな比重を占めていることを示している。この研究結果を踏まえると、保育職志望の高校生は、そもそもそこまで念入りに、自分の進路について考え尽くしてはいないということが考えられる。また大久保（2015）によれば、保育者になることを保育者養成校入学の時点で心に決めていた学生は２割程度で、保育者以外の仕事にも興味を持っていたり、そもそも何になりたいのかわからない状態で入学したりする学生が８割近くであったとのことであった。保育職は小学生の頃より女子に人気の職業であり、なりたいものランキングでは上位の常連である。たとえば第一生命の幼児・児童を対象とした調査では、1990年から年１回発表されるランキングで、トップ３に入らなかったのは、1993年、1998年、2000年の３回だけである（第一生命、2017）。しかし、その憧れや決心の強さは、必ずしも強いもの

ではないのかもしれない。またそれゆえ、そこまで積極的に情報収集をしようとも思わず、保育職に対する誤解や理解不足があるままに保育者養成校に入学し、保育の実際を知ってギャップを感じてしまうのかもしれない。

本研究はこれらの先行研究を受けて行うものである。高校生が保育ボランティアや職場体験などを通して形成したと思われる「保育者」「保育者の仕事」に関する認識の中で、書き物はより具体的にどのようなものとなっているのだろうか。この点について調べた研究は限られている。永盛（2012）はこの点について調べているものの、調査対象人数が20名と非常に限られており、「高校生は保育者の仕事として保育の計画や書き物があることを理解していない」という結果を一般化するには問題がある。また、保育者の仕事内容を自由記述形式で尋ねたため、たとえこれらの業務に対する理解があったとしても尺度があいまいなため書いてこなかった可能性があった。そこで本研究では、保育者志望の高校生の調査対象者を増やすとともに、保育者の業務としての書き物に何があるかを明示的に尋ね、書き物業務に対してどのように認識しているかを明らかにすることを目的とする。

方法

対象者：子ども学科オープンキャンパス参加の高校生141名[2]。
形式：アンケートの一斉配布・回収。
質問項目：

①保育者（幼稚園教諭・保育士のこと）と聞いてイメージすることはなんですか。
②保育者の仕事と聞いてイメージすることはなんですか。
③保育者の仕事は「書き物が多い」と言われます。そのことを聞いたことがありますか。（ある・ない）
④実際には、どんな書き物があると思いますか。
⑤「子どもの遊び」と聞いて思いつくものは何ですか。

質問④を除いて、いずれも自由記述形式で尋ねた。各回答欄はおよそ縦３センチ、横15センチ程度のものを設けた。なお、本研究では、質問①②③④を分析する。質問⑤について、アンケート作成当初は、高校生がイメージする遊びと保育における指導計画のある遊びとの内容の違いを検討することを考えたが、違いは遊びの内容そのものではなく、その遊びについて計画を立てるかどうかということにあり、質問⑤ではこの点について調べることができないため、今回は分析対象から除外する。

[2] 文章の得意不得意には性差があり、女性の方が比較的得意であることが指摘されている（たとえば前田、2015）。ただし、本研究の調査対象者、そして実際の入学者のほとんど（本学では約９割）が女性であり、それでも書き物に苦手意識があることや、保育者養成校における保育記録や指導案の指導に関する研究論文において性差は特に問題となっていないこと、さらに、記録や指導案に留まらず、より広く学生の文章力低下について調べた佐藤（2014）や宮崎（2015）においても性差は取り扱われていないことから、今後の検討課題としつつ、本研究では性差を検討としないこととする。

日時：2016年７月31日。

手続き：学科オープンキャンパス内の模擬講義開始時に、アンケート用紙を一斉配布・回答・回収した。なお、対象者への倫理的配慮として、アンケート用紙には質問に先立って「以下の質問について、今の気持ちや考えをいくつでも教えてください。お答えいただいた内容については。学内外での報告に使わせていただくことがあります。その際は、個人が特定できる形では用いません（そもそも無記名です）ので、安心してお答えください。」と記してある。また、用紙配布時にはこの文言を口頭でも伝えるだけでなく、回答は任意であり、答えたくない場合は無回答のまま提出して差し支えない旨、併せて伝えた上で回答いただいた。

結果と分析

１．質問①保育者のイメージの分析

対象者の回答を、次の７タイプに分類した：各タイプの出現総数順に個人の内面、子ども関連業務、スキル・資質、保育職の印象、労働環境、保護者関連業務、その他。各タイプとその内訳の出現数をまとめたものが下表１である。なお、１名が複数の記述を行っていた場合、それぞれを出現数に含めた。

表１．「保育者」イメージ７タイプの出現人数

個人の内面	*109*	*子ども関連業務*	*92*	*スキル・資質*	*53*
優しい	38	子どもと関わる	27	子どもが好き	22
笑顔	22	成長をサポート	12	音美体	8
明るい	21	子どもを育てる	11	責任感	7
元気	13	子どもの世話	9	子ども目線	3
思いやりがある	3	指導	9	気配り	3
しっかりしている	3	子どもと遊ぶ	10	コミュニケーション力	2
一生懸命	1	親のよう	4	体力	2
広い心	1	命を預かる	3	器用	1
若々しい心	1	見守り	3	健康	1
厳しい	1	子どもを預かる	2	声が通る	1
かわいい	1	子どもの手本	1	字が綺麗	1
親切	1	先生	1	清潔	1
性格がいい	1			見通し	1
丁寧	1				
前向き	1			*保護者関連業務*	*3*
				保護者との関わり	2
保育職の印象	*20*	*労働環境*	*12*	保護者をサポート	1
楽しそう	8	給料が低い	4		
大変	4	人手不足	2	*その他*	*5*
やりがい	3	女性の職場	2	エプロン	1
子どもと共に成長	2	人間関係が大変	1	人間関係	1
大切な時を一緒に過ごす	2	規則が厳しい	1	自分の憧れ	1
発見が多い	1	社会で必要	1	子どもの憧れ	1
		産後も働ける	1	書き物が多い	1

保育者のイメージを尋ねる研究では、「優しい－怖い」といった対義語を複数提示して、評定を求めていくものが見られる（たとえば脇、2005や広瀬、2013など）。本研究は自由記述であったものの、先行研究とほぼ同じく、「優しい」「明るい」「元気」といったものが多く出現した（本研究では「個人の内面」タイプに分類）。また、保育者のイメージ研究としては、他に、鳥丸（2016）が保育者養成校入学直後の学生を対象に、「保育者」をキーワードとした学生によるマインドマップと文章構成法から得られた文に、テキストマイニングを行ったものもある。そこで得られた40のキーワードのうち、上位10個は次のようなものとなっている：子ども、保育者、笑顔、ピアノ、元気、必要、上手、好き、人、保護者。これに対し本研究でも類似した結果がいくつか得られた。たとえば、子どもに関するキーワードとしては「子どもと共に成長」「子どもが好き」とあったり、「子ども関連業務」タイプの中に「子ども」に関する種々の記述が得られている。また、本研究で「個人の内面」タイプに分類した笑顔、元気といったキーワードも、鳥丸（2016）と共通して出現したものである。また、数は少ないものの、鳥丸（2016）において出現した「必要」「保護者」について、本研究でも「社会で必要」「保護者との関わり」「保護者をサポート」といった回答が得られている。ただ、このような保育者イメージはまだ表面的・理想主義的なものであり、入学後の学びや実習を経て容易に変容することも指摘されている。椛島ら（2007）は、期間や場所を決められた実習ではなく、空き時間に自主的に参加する保育活動における学生の利用表での記述を分析し、子どもや保育者を見る目が漫然としたものから徐々に意識的なものへと変化していったと報告している。また京免（2011）は実習を通しての学生の保育者イメージの変容を尋ねており、約半数の学生はイメージが変化したと報告している。その変容の中でも、半数はよいイメージになっているものの、残りの半数は悪いイメージへとなってしまっている。本研究で高校生を対象に得られた結果についても、あくまで高校生時点でのイメージであり、今後多様に変化していくものと捉えておく必要があるだろう。

本研究の目的である書き物や保育計画の作成について見ると、直接的に書き物に言及したのは「書き物が多い」という１件のみであった。その他に、書き物に関連しそうな回答として「字が綺麗」というものも１件のみあった。これまで取り上げてきた先行研究においてもそのような姿は出現しておらず、デスクワークをする保育者の姿は、あまり想起されないようである。ただし、「書き物」と直接明示してはいないものの、「子どもを育てる」「指導」といった回答もそれぞれ11件と９件見られた。高校生がどこまで具体的にイメージしたかは不明であるが、子どもが育つためには時間が必要であり、放っておいても勝手に育つわけではなく、大人の関わりが必要となる。また、大人が関わる際も何も考えずに関わるわけではない。特に保育者においては、「指導」といえる関わり方も出てくるだろう。そのような意味では、保育計画の作成を直接想起したかは分からないものの、関連しそうな回答が一部出現したと見ることができる。

２．質問②保育者の仕事のイメージの分析

永盛（2012）では、高校生が考える保育者の仕事を次の８タイプに分類した：成長の援助、園内業務・準備、保護者、世話、連絡帳、遊び、楽しみ、その他。今回の調査での回答でも、ほとんど同様の結果が得られた。本研究の目的に照らして言えば、

保育の計画・指導案といった書き物に関する回答は直接的には出現せず、書き物としては連絡帳、おたより、掲示物という回答が８件、記録に関する回答が１件あるのみであった。前回の調査対象者は21名と少なく調査結果の信頼性に欠ける部分があったが、今回約141名に尋ねても同様の結果が得られたと言える。

３．質問③書き物の多さに対する認識の分析

対象者の回答を「ある」、もしくは「ない」で集計したものが下表２である。

表２．書き物の多さを聞いたことがあるか

回答	人数
ある	93(66%)
ない	48(34%)

約３分の２は、保育者の書き物業務が大変であることを認識しているという回答であった。ただし、この質問だけでは、どれほどの大変さであると考えているかは明らかにならない。この点について、永盛（2016）において、保育者養成課程入学前後で「思っていたものと違っていたもの」として「書き物」が筆頭に挙げられていた。また、渡邉（2004）や深澤（2016）が指摘しているように仕事を辞めようと思うほどの大変さと認識しているならば、その上で保育者を志望するとは考えにくい。したがって、ここでの「ある」という対象者の回答は、「『書き物も保育者の業務である』と知っている」程度のものと受け止めることが妥当と思われる。

４．質問④書き物の種類に対する認識の分析

前節で見たように、約３分の２の対象者は書き物も保育者の業務とみなしている。ここでは、その業務としてどのような書き物があると考えているかを明らかにするため、対象者の回答を書き物の種類ごとに８つに分類した。なお、原則として同一回答が２名以上いた場合に１タイプとみなした。ただし、２名以上いた場合でも、実質的には他の類似した回答と統合できると思われる場合には、より汎用的なタイプに統合した（たとえば、「記録」タイプには「成長記録」「日誌」「レポート」といったものが統合された）。また、１名が複数タイプの記述を行った場合、それぞれを集計に加えた。したがって、出現総数は調査対象者の数よりも多くなる。なお、先取りとなるが、種類の記載順序は、出現数の多い順となっている。

連絡帳：端的に「連絡帳」とだけ記したものや、「連絡ノート的なもの」など表現が若干ぼやけているもの、「今日のお子さんの様子を手帳に書く（連絡帳）」などより詳細に記したものが含まれる。

記録：タイプ名通り「記録」とだけ記したものだけでなく、「日誌」「レポート」「成長記録」などと表現したもの。いずれも、行った保育の内容やその結果など、行ったことについて記したものである。ただし、書いた中身を読むのは、「連絡帳」タイプとは異なり保護者ではなく、書いた保育者自身や同僚・上司、小学校教諭などである。

おたより：端的に「おたより」としたものや、「クラス通信」「クラスだより」など、

保護者に向けた書き物である。ただし、「連絡帳」のように毎日書くようなものではなく、基本的に月単位で書くものである。

制作物：主に子どもに向けて提示するものがこのタイプに含まれる。具体的には「壁面装飾」「教室の掲示物」「絵」「絵本」「誕生日カード」「アルバム」「図工」「教材」「名前書き」「創作」といった回答が得られた。どちらかというと、書き物の印象は他のタイプと比べて薄いという特徴がある。

計画：「指導案」としたものと、「計画」としたものが含まれる。これまで挙げてきた「記録」「おたより」「連絡帳」は、行った保育の内容や実際に見られた子どもの姿といった過去に焦点がある。これに対して、「計画」はその過去の「記録」を元に作成される未来に注目点があるという違いがある。

出席簿：園児の登園に関するものであり、具体的には「出席簿」「出欠」「欠席者」「名簿」といった回答が含まれる。

その他：原則１名のみが記したものがここに分類される。具体的には「課題」「実習録」「メモ」「申請書」「書くよりパソコンのイメージ」といったものであった。「メモ」のみ２名が記していたが、メモの用途が不明であり、これ以外のタイプに統合することが困難であったため、その他タイプに含めた。

無回答：質問④の欄が空白となっていたもの。

以上のタイプについて集計したのが下表３である。

表３.「書き物」として高校生が記載したものの出現数

タイプ	度数
連絡帳	98
記録	61
おたより	48
制作物	27
計画	6
出席簿	4
その他	5
無回答	3

まず、「連絡帳」「おたより」を合わせると146となり、全出現数の５分の３程度となる。ここから、高校生の認識としては、保護者に向けた書き物が思いつきやすいことがわかる。実際、保育現場を外から見てもイメージしやすく目に入るのは、この２つであろう。また目に入ると言えば、27件出現した制作物も園を見学したり体験学習などに行ったりすれば見られるものであり、印象に残るものであると言える。記録や出席簿に関しては、必ずしも目に入るものではないものの、高校生自身が何かをした際に記録をつけていたり、学校などで出席簿に出欠を記されていたりすることがあるため、自らの経験と照らし合わせて想像できる部分であったのかもしれない。これを敷衍するならば、保育計画の作成についても、中学生・高校生のころの保育ボランティアや職場体験で遊びの計画などを立ててみることで、保育計画の作成も保育者の仕事であることの理解が深まるかもしれない。ただし、この実践については、難しさ

もある。高見ら（1999）が示しているように、保育現場に理解と協力を求める必要がある点である。関わりにおいてすら、高校生が「保育者」として関わることを求めていない中で、より難易度の高い保育計画の作成となると現場の保育者による協力は不可欠であろう。もう１点、この体験を通して、高校生が「この程度で大丈夫」と思ってしまい、結果的に実際の保育者養成課程での学びや保育現場の理解に関する新たなギャップとなることを避ける必要がある。

次に、本研究の中心的テーマとなっている「計画」については、６件しか出現しなかった。全出現数の約２％程度であり、極めて想起されにくい、もしくは知られていない書き物業務であると言える。この結果は、永盛（2016）にて短期大学生が学びのギャップとして挙げていたことと一致する。ただし、全く出てこなかったわけではない。この点を含め、保育者のイメージに関する回答と併せて次節で分析を行う。

５．質問①と質問④のクロス分析

本節では、質問①と質問④それぞれの回答について、いくつかの焦点を当ててクロス分析を行う。まず質問①で保育の計画と関わりそうな「子どもを育てる」「指導」「書き物が多い」「字が綺麗」と回答した対象者の、質問④での回答をまとめたのが次の表４である。１名のみ、「子どもを育てる」「指導」と２つ回答していたため、この回答については、「指導」に集約した。

表４．質問①での「保育の計画」に関連する回答と質問④の回答のクロス集計

質問①	連絡帳	記録	おたより	制作物	計画	出席簿	その他
子どもを育てる	6	3	2		1	1	1
指導	5	4	4	1	1		1
字が綺麗	1						
書き物が多い	1						

該当した回答者は18名と少数であったが、その中でも保育の計画を挙げているものは２名おり、この回答者については子どもを育てるためには指導が必要であり、そのためには計画を立てることがあると認識していると思われる。また、「字が綺麗」と答えていた１名については、その具体的な業務としては連絡帳を想定していたという回答が得られた。最後に「書き物が多い」という回答についても、その内容は連絡帳であるということが確認された。

次に、質問④で「計画」と挙げた回答者６名が、質問①でどのような回答をしていたのか集計したのが表５である。なお、１人の回答者が質問①で複数タイプの回答をした場合は、それぞれを集計に含めた。

表５．質問⑤での「計画」という回答者の質問①での回答

個人の内面	*3*	*子ども関連業務*	*7*	*労働環境*	*1*
笑顔	1	子どもと関わる	1	規則が厳しい	1
明るい	1	子どもを育てる	3		
元気	1	指導	1	*スキル・資質*	*1*
		命を預かる	1	健康	1
保育職の印象	*4*	成長をサポート	1		
やりがい	1				
共に成長	1				
大切な時を一緒に過ごす	1				
発見が多い	1				

６名の質問①での回答は、表５に見られるように多様なものであった。ただ、そうはいっても、保育の計画と関連の強そうな「子どもを育てる」「指導」といった回答は４件見られている。また、直接関わるわけではないが「成長をサポート」といったものも見られた。これらの回答者においては、子どもの成長と関わる仕事であること、そしてその基底に保育の計画があることが認識されているものと思われる。

考察

本研究の目的は、保育職志望の高校生における書き物業務（特に指導計画）に対する認識を明らかにすることにあった。そこで、高校生に書き物業務に対するアンケート調査を行った結果、保育者の業務としての書き物が多いことは、約60％の回答者が認識していた。実際にどのような書き物があるかを尋ねた場合、最も多く想起されるのは「連絡帳」であり、約３分の２の回答者が記入した。つづいて「記録」「おたより」といった回答も、約３分の１の回答者が記入していた。一方で、本研究で特に焦点を当てていた保育計画の作成に対する直接的回答は141名中６件とあまり得られなかった。また、その原因として、保育者や保育者の仕事に対する理解はまだ不十分であるとともに、職場体験での学びによって書き物に対する意識が向かわなくなる可能性を指摘した。

永盛（2016）や木梨（2017）が示しているように、保育者の業務は高校生が思っている以上に大変なものである。そのため、保育者就職に対してそこまで強い決意を持っていない状態で、「このような業務もある」と安易に伝えることは、そもそも保育者となることを諦めてしまう可能性がある。本研究で示したように、高校生は書き物業務に対して全く知らないわけではない。回答者の約３分の２は、その把握内容自体は不十分ながらも、書き物業務があることを把握していた。

ここでは、このことを踏まえた、保育の計画に関する指導について考察を行う。

まず、書き物と言っても種類は多様であるが、ここで重要と考えるのは、過去指向のものと未来指向のものという時間軸の導入である。過去指向のものの中で見られた回答は連絡帳、記録、おたよりといったものである。一方、未来指向のものは計画となる。制作物は、過去と未来の両方が含まれる。このように見ると、回答として多く出現した連絡帳、記録、おたよりはいずれも過去指向のものであったことがわかる。一方、未来指向の計画は、あまり出現しなかった。過去のものはすでに行った保育で

あり、具体的な子どもや保育者の姿があり、比較的想像しづらい。これに比べて、計画は、まだ見ていない先の子どもや保育者の姿を想像する必要があり、このことが、保育計画の作成の困難さの一因となっていると思われる。このことのヒントとなるのは、記録である。保育における記録は、単に書くだけのものでも、備忘録でもない。「毎日の保育のようすを、記録しておきます。子どもたちのようすで気づいた点も書き込みます。次の指導計画を立てる際や、保護者との話し合いにも役立ちます」（成田、2002、p.101）や「記録は、その日に行った保育の内容や事象を冷静に評価し、明日の保育に役立てるためのもの」（岡田、2001、p.39）とあるように、記録にある過去の具体的な姿をもとにして、未来の姿を計画するのである。ただ、記録といえども難しさはあり、また、高校生の認知度も連絡帳と比べると若干下がる。また、連絡帳やおたよりが保護者向けであるのに対して、記録や計画は内部向けのものである。これらのことを考慮すると、指導計画の作成に関する教授形態も考えうるだろう。

まず、指導計画作成にあたり出発点とするのは、特に多かった回答は連絡帳やおたよりといった保護者向けの書き物である。連絡帳やおたよりは、記録や指導計画などとならんで、保育者養成課程学生向けの文章の教科書で取り上げられている（木梨，2017；谷川，2006，田上，2010）。連絡帳やおたよりは、保護者向けに書かれているため、場合によっては自分が子どもだった頃のものも目にしていたり、読むこともできたりするかもしれない。そのような意味では、学生にとってなじみがあり、当然書くものと考えており、書くことへの抵抗感が比較的少ないと想定される。その上で、書いて当たり前のものとして終えず、なぜ保護者に連絡帳やおたよりなど書く形で伝える必要があるのか、これらのものを書くことは保護者、保育者にとってどのような意味や意義、利点や良さがあるのかを考える。つづいて、同じく高校生の時点で認知度が比較的高く、保護者つながりということでおたよりを書く。その上で、保護者向き、言うなれば外向きの文書だけにとどまらず、保育者自身や他の保育者といった内向きの書き物もあることを伝える。その際、記録が重要な役割を果たす。記録は、上述したとおり、内向きであると同時に、過去指向のものであり、保護者向き・過去指向の連絡帳・おたよりと、保育者向き・未来指向の計画とをつなぐ、両方の側面を持った存在と見ることができる。このステップを設けることにより、計画の作成に対する学生の抵抗感をわずかながらでも減らすことができるかもしれない。そして、記録においても、実際の保育の観察でも保育の映像視聴でもよいので実際に作成した上で、その意味・意義を考える。そして最後に、記録から保育の計画の作成へと移行していく。このような、具体と抽象の往復活動を繰り返しつつ、高校生や学生においてイメージとのズレが大きく、難易度が高い指導計画の作成へと徐々に移行していくといった過程が考えられる。このような方法を通して、久富（2009）が次に述べるような指導計画の作成に関する授業として展開していければと考える：「『指導案を書く』ということが、あなたにとって、たいへんだけれども意味のあるやりがいのあることと思えたとき、専門職としての保育者への道が確かなものとして見えてくる」（p.2）。

引用文献

第一生命保険会社（2017）第29回「大人になったらなりたいもの」調査結果を発表. News Release 2018年１月５日号，１－15.
深澤友紀（2016）保育園連載①保育士が忙しすぎる：書類作成に行事準備…トイレに行けず膀胱炎／19年目で手取り16万円．AERA，29（35）（2016年８月15日号），54－56.
広瀬由紀（2013）高校生が抱く保育士のイメージと職業選択の基準．植草学園大学研究紀要，５，95－101.
久富陽子（編）（2009）幼稚園・保育所実習指導計画の考え方・立て方．萌文書林.
開仁志（編著）（2012）保育指導案大百科事典．一藝社.
椛島香代・平山許江・松村和子・牧田薫（2007）保育学科学生の実習体験におけるキャリアデザインの構築に関する研究．文京学院大学総合研究所紀要，８，129－148.
木梨美奈子（2017）もう「書く」「伝える」に困らない！保育で使える文章の教科書. つちや書店.
京免徹雄（2011）女性保育者の初期キャリア形成に関する一考察：短期大学生の職業間の変化に着目して．早稲田大学教育学会紀要，13，235－252.
三浦伸子・垣内国光（2011）保育者の専門性意識と職場の現実．In 垣内国光（編）保育に生きる人々：調査に見る保育者の実態と専門性（第１章、29－58）．ひとなる書房.
前田敬子（2015）書くことの「幼保小連携」．仁愛女子短期大学研究紀要，47，45－56.
宮崎加代子（2015）「文章を書く力」をめぐる課題と指導:大学一回生の作文分析から. 大阪総合保育大学紀要，９，29－42.
成田朋子（2002）学習まんが保育士さんになろう！小学館.
永盛善博（2012）保育者志望の高校生における保育職の理解状況．東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要，３，53－64.
永盛善博（2016）保育者養成課程学生が感じる保育のギャップ．東北文教大学・東北文教大学短期大学部教育研究，７，11－23.
永盛善博（2018）保育者養成課程学生における中高の職場体験の内容:保育の計画性・指導案作成に関する体験に焦点を当てて．日本発達心理学会29回大会発表論文集.
岡田正章（2001）保育園・幼稚園の先生をめざす人の本．成美堂出版.
大久保義美（2015）保育系学生の「保育士志望」の背景にあるものは何か．瀬木学園紀要，９，70－77.
佐藤達全（2014）保育科学生の文章表現力低下の原因と対応：日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして．育英短期大学研究紀要，31，57－71.
白石崇人（2015）幼児教育の理論とその応用②保育者の専門性とは何か．社会評論社.
田上貞一郎（2010）保育者になるための国語表現．萌文書林.
高見令英・水野智美・山本哲也・桐原宏行・望月珠美・横山範子・徳田克己（1999）幼稚園における高校生による職場体験学習についてⅠ：高校生に対する意識調査の結果を中心として．日本保育学会大会研究論文集，52，794－795.

田中亨胤（2011）監修者のことば．In 山本淳子（編）．記入に役立つ　保育がわかる実習の記録と指導案（p.2）．ひかりのくに．
谷川裕稔（2006）保育者のための文章作成ワークブック．明治図書．
谷川夏実（2013）新任保育者の危機と専門的成長：省察のプロセスに着目して．保育学研究，51（1），105－116.
鳥丸佐知子（2016）保育士養成関連授業は学生の何を変えたのか：「保育者」イメージを中心に．京都文教短期大学研究紀要，54，41－46.
内田豊海・松崎康弘（2016）保育・教育現場における早期離職の原因とその後：短大卒業生の事例をもとに．南九州地域科学研究所所報，32，17－32.
脇輝美（2005）保育・初等教育専攻の学生が抱く保育士イメージと子どものイメージとの関連性：文献及び意識調査に基づいて．別府大学短期大学部紀要，24，99－108.
渡邉保博（2004）はじめに．In 保育計画研究会（編）実践に学ぶ保育計画のつくり方・いかし方．ひとなる書房．
吉村真理子（2001）保育とは、保育者とは．In 森上史郎・岸井慶子（編）保育者論の探求（pp.1－20）．ミネルヴァ書房．
山本睦（2014）保育職の職場体験学習の特徴：職場体験時の活動内容に着目して．日本教育心理学会総会発表論文集，56，825.
山本哲也・水野智美・高見令英・桐原宏行・望月珠美・横山範子・徳田克己（1999）幼稚園における高校生による職場体験学習についてⅡ：保育者の意識調査および子どもの反応．日本保育学会大会研究論文集，52，796－797.